

オライリー『WTF 経済』 訳者解説

本書はティム・オライリー『WTF Economy』(Basic Books, 2018) 全訳である。翻訳にあたっては出版社から得た pdf ファイルの最終ゲラを元に、随時ハードカバー版を参照している。

現代 WTF? は、感嘆表現 What the Fuck!? の略で、口語ではかなり普及しているとはいえ、結構お下品な表現ではある。そして日本語の「ヤバイ」と同じで、当初は悪い意味ではじまったけれど、だんだんよい意味でも使われるようになってきた。原題はさらに「What's The Future?」(未来はどうなる?) の略も兼ねさせるといふ、いささか訳者泣かせの仕掛けまでほどこしている。これを完全に訳しきるのは不可能なので、ご覧のような処理にさせていただいた。

1. 本書の主張と著者について

本書の主張は、新しい技術がもたらす WTF? という驚きを、悪い驚きではなくよい驚きにしていこう、というものだ。そしてインターネットやオープンソースソフトで彼が果たした役割(およびそのときに活用した考え方や手法)を、人工知能や大規模ネットプラットフォームの台頭にも適用することで、それが実現するのではないかと著者は述べる。

著者ティム・オライリーといえば、特に Unix 系のコンピュータ関係者なら知らぬ者のない出版社オライリーの親玉だ。この邦訳の版元がオライリー・ジャパンなので、わざわざ説明するのは蛇足もいいところではあるけれど、主に古い動物の銅版画を表紙にあつらえた同社のシリーズは、各種のプログラミング言語やプロトコル、ソフトなどについての世界的スタンダードだ。しかも常に話題が盛り上がり始めた見事なタイミングで、ツボをついた本が登場する。

なぜそんなことができるのか? 本書を読むと、それが明らかとなる。

- ・ 著者とその同志デール・ダハティが、Unix スクリプト活用により入稿から出版までの時間を大幅に短縮し、素早い刊行を実現。
- ・ 出版事業とカンファレンス事業の相乗効果。先端的なネタが熟すのを待つのではなく、その筋で話題になっているトピックの主要人物を集めてイベント

を開催し、ムーブメント化することで自ら市場を作り出す。

- ・ ティム・オライリー（とその仲間たち）の嗅覚

本書は、特にその嗅覚の中身を著者が自ら述べるという、非常に興味深いものだ。どういう考え方で、何に注目することで、多くの技術トレンドを先取りできたのか？

さらにこうした技術的な動きは、技術屋の世界を超えたもっと大きな社会変化をも生み出した。それも単なる便利な道具を提供するだけでなく、社会自体の仕組み変化がコンピュータ業界での技術構造の変化を反映する様子さえある。すると、これからの社会変化の萌芽も、先進的な技術やそれを体現する企業に見られるはずだ。著者が注目するのはどこか？ そしてそうした動きを、意識的にもっと大きな社会的課題の技術的解決へとつなげるために何が必要と考えているのか？ これが本書の見所だろう。

2. 本書のあらすじ

まず著者は、自分が深くコミットしていたコンピュータの歴史をふりかえるところから始める。

その昔、パーソナルコンピュータが生まれ、多種多様なマシンが登場したけれど、仕様をオープンにした **IBM PC 互換**がプラットフォームとなったことで一時は **PC/AT 互換機**メーカーがコンピュータ業界の覇者となった。すると収益源はそのプラットフォームを揃えるための **OS** とその上のアプリケーションに移り、マイクロソフトの覇権がやってきた。

そしてオープンソースソフトとインターネットの普及により、ウェブが共通のプラットフォームとして普及し、今度はその上で提供されるサービスが重要となった(ウェブ 2.0)。利用者の多くがパソコンからモバイルに移行するにつれて、その性質は強まる。

グーグルやフェイスブックやアマゾンが **API** を公開し、他のプレーヤーがサービスを構築するための新たなプラットフォームとなり、そしてそこで利用者について収集したビッグデータも活用できるようにしている。

自分は、こうした動きが持つ自発的な協働性と、それを可能にするプラットフォーム性やオープン性に着目していたのだ、と著者は述べる。そして新しい

価値を生み出すトレンドやビジネス領域は、かつての主戦場に隣接したところにシフトする。自分はそれを常に念頭に老いていたのだ、と。

そこから著者は、次の大きな価値創造の場だと考えている領域と、それを体現する企業を述べる。Uber(および Lyft)や Airbnb などの、シェアリングエコノミーの代表とされる企業だ。それらは以下のような特徴を持つ。

- ・ 物質を情報で置きかえる
- ・ ネットワーク化された市場プラットフォーム
- ・ オンデマンド
- ・ アルゴリズムによる管理
- ・ 補助拡張された労働者
- ・ 魔法のようなユーザー体験

そしてこれらは、シェアエコノミー企業だけの話ではない。Uber はきわめてインターネット的なやり方を、都市交通という実体経済に持ち込んで、それを大きく変えつつある(よかれあしかれ)。同じように、こうした考え方を実体経済に適用して改善できる部分はずっと多いはずだ！ たとえば以下のようなアイデアが述べられる。

- ・ Uber などのオンデマンド労働による通称「ギグエコノミー」は労働を根本的に変える。ブラック企業の悪質な非正規雇用より、そうした自由度ある労働形態を主流にすることで労働市場も改革できるのではないか？
- ・ 企業自体は、アマゾンのように各部局が他の社内部署（及び社外）に API 経由でサービスを提供するプラットフォーム型組織になれるのでは？
- ・ 行政も、いまのお役所仕事ではなくもっとプラットフォーム的にして、人々が自由に活用できる API 群にしてしまえばよいのでは？
- ・ フェイクニュース問題は、アルゴリズムの活用とブロックチェーンなどによる正真性確認で改善できるのではないか？

ただし、そうした変化をうまく人間重視の方向に持つていくためには、社会全体の指向を人間重視に変えねばならない、と著者は述べる。まず、そもそもこうした変化を許容するような規制緩和が必要だ。それができたら、目標設定

さえしっかりしていれば、機械学習を通じたシステム最適化を急速に行うことも可能だ。

だが現在の教育は、こうした新しい動向に向けて人々の永続的な学習を支援するものになっていない。さらに実体経済を犠牲にお金の亡者と化した金融資本主義が、技術の非人間的な活用を生み、格差の拡大を引き起こしている。これを変えねばならない、と著者は述べる。それを実現するのが我々の選択だ、と。

ある意味で、本書はテクノ楽観主義の書だ。グーグルやフェイスブックなど（通称 **GAF**A）が巨大プラットフォームとして台頭してきたことを、類書の多くは警戒する。そうした私企業が、社会全体を左右するような大きな力を持ち、民主主義的なチェックなしで何でもできる点を危惧することが多い。本書はそのような見方はせず、こうした技術プラットフォーム系企業の成功と台頭を、自分の見てきた技術発展の自然な流れととらえ、生じている各種問題もアルゴリズムによる技術的な問題だとする。これ自体には異論のある人もいるだろうが、一方で著者ならではの技術的視点として刺戟的なものだ。

そして、その視点から出てくる **Uber** に触発された新しい社会へのビジョンも、ティム・オライリーならではの説得力を持つ。オンデマンドで労働者が自発的に働く、通称「ギグエコノミー」については、批判的な見方もあるし、また限られたものだからあまり過大な期待をすべきではないという声も強い。でも、パソコンもインターネットも、オープンソースソフトも、キワモノ扱いされているうちに、いつのまにか天下を取った。そうした動きを先取りした著者の指摘は、一概に無視できるものではない。

それが主流にならない場合でも、現在の社会制度が機能不全に陥りつつあるように見える中、あり得る別の仕組みのヒントとして、一考の価値はあるだろう。しかも行政のプラットフォーム化をはじめ、多くの提案はすでに著者が何らかの形で試したという実績まである。

そのための前提として挙げられる、資本主義批判や格差批判となると、さすがの著者も技術的な解決策を持っているわけではない¹。批判としてはわかるが、

¹ 蛇足ながら、著者の経済についての話は多少誤解がある。13章では、グーグル社の経済影響報告に出た、広告主等の収益増加の数字がそのまま **GDP** への貢献だと述べている。でもその分他の会社の仕事が減っていれば **GDP** には影響しない。経済全体への価値創造を見るには別の考え方が必要となる。また13章に出てくる気候変動についての対応は、かなり疑問が多い。著者はそれをパスカルの賭けと対比させている。が、パスカルの賭けは通常、まちがった考え方の代表例とされていることは忘れてはいけない。

「みんな拝金主義はやめよう」というだけでは事態が変わるはずもない……の
だろうか？

実はあまり明示的には書いていないながら、この分野でも著者は営利だけを
重視しないベンチャー資本、ユーチューバーの大量発生、メーカー運動とクラ
ウドファンディングの拡大で、各種プラットフォームに基づく新しい価値流通
の仕組みができあがる可能性に期待をかけているようだ。さてこの見通し、ど
こまで当たるだろうか？ 案外これまた十年後に「ティム・オライリーはやっ
ぱり慧眼だった」ということになるのかもしれない。

本書はもっぱら、アメリカを舞台にしているし、事例も主にアメリカ中心だ。
でも各種プラットフォームの影響力はもちろん日本でも変わらないし、著者の
見方も十分に適用できる。そして実現可能性はもとより、著者の指摘する社会
変革の必要性や、技術的な解決策の一部は日本にこそ必要なものかもしれない。

いや、日本だけではない。実はこれを書いているのはキューバのハバナ（し
かもできすぎた話だが、そのオライリー通りのカフェオライリー）だったりす
る。こうした国も、国際情勢や
経済環境の変化とともに今後
大きく変わらざるを得ない。そ
こではおそらく技術が、よかれ
あしかれ大きな変化のツール
にもなり、場合によってはその
原動力ともなるだろう。その方
向性を見るためにも、著者の視
点は有用かもしれない--それ
がこの地でどう展開するかは、
もちろんいまのところ見当もつ
かないのだけれど。



図 1 ハバナのオライリー通り

かつて『[Linux 日本語環境](#)』を出してもらい、その後もいろいろ出版物にお
世話になったオライリーから、その親玉の本を訳して出すというのは、個人的
にとっても感慨深い体験ではあった。ありがとう。非常に明快な本で、特に悩む
ところのない翻訳ではあったけれど、思わぬまちがいもあるはずだ。お気づき
の方はご一報いただければ幸い。明らかとなったまちがいは、サポートページ

<https://cruel.org/books/WTF/> で随時公開する。

本書の編集は、田村英男氏が担当された。

2018年10月

ハバナ、オライリー通りにて

山形浩生 hiyori13@alum.mit.edu



図 2 カフェ・オライリー。ハバナのコーヒー屋の中でかなり優秀